2007.12

Vol.7

［シリパのほし］

Shiripaの星

北星学園余市高等学校同窓会誌

H.S

「生きていく」ということ

32期　小宮　賢一

ご無沙汰しております、山先生いかがお過ごしでしょうか。

夏が終わり、支度を急ぐ秋の間に冬が来ます。慌ただしい日々の中、久しぶりに先生の声を聞いて静かに降り積もる雪を思いました。

早いもので卒業から九年、学校は何か変わりましたか？お役職もお変わりになられましたね。大変なお立場の中頑張っておられる先生の姿が思い浮かびます、自分の方もあの頃感じた怒りや喜び、疑問や我慢は今も本質的に変わりなく自分を突き動かす力です。「生きる」というテーマは、何時しか「生きていく」というふうに変わり自分に足りないことや夢や希望を再確認し毎日が奮闘です。人生はまるで暗闇です。巨大な欲望のためにこの時も何処かで誰かが銃に倒れ家族を奪われ、一部の私腹のために朝から晩まで扱き使われて嘘までつかされて、格差の中に子供たちは虐待され、人は人を疑い、不幸をネタに飯を食う全ては地位とか名誉のための世の中。その中をくたくたになっても自分たちは生きているからです。何が正しいとか正しくないとか、そんなことよりも大切なことを一筋の光のように探しています。器用になった分あの頃のようにぶつかり合うこともないけれど要領とともに傷付かない振りを覚えたわけでもない。ただあの頃のように自分のままでいたい、それだけです。

自分は余市から本当に濃い三年間を貰いました。でもそのことが余計に自分から本当の卒業を遠ざけたのかもしれません。卒業してから自分は何度も北海道に足を運びました。仲間に会いたかった、本音の中に居たかった、おそらく比べてしまっていたのだと思います。上辺だけの繋がりや意識、常識に束縛された社会に苛立って放棄、現実逃避したかったのですね。しかし面白いように母校に自分の居場所はありませんでした。殴り合うまで話し合わなければいけなかった教室、誰も居ないトイレ前、沈んでいく夕日に直接そう言われた気がしました。そこにはその時代を生きた「その時の為の時間」だけが流れていました。だからこそ自分は探そうと思ったのです、自分にとっての「その時の為の時間」が必ずあると信じました。過去ではなくて今、目の前にいる人や物事と向き合おう、何も信用できない世の中だから信じられるものをつくろうと。北星を卒業しようと。

自分は今、生まれ育った地元を拠点に音楽活動をさせてもらいながら約七年目を迎え、仲間と共にそれを仕事にしようと走り回っています。大切にしたいことがあって皆がそれを守る勇気を持っている、良いも悪いも自分次第で見たままの事実という現場に惚れています。自分が素直に心を開くところにはいつも刺激的な出会いがあり、求めている感動が待っている気がします。どの場面にも豪華に用意されたスペースなどは無く、せめぎあいで奪い合いかもしれませんが、業界の渦、社会というものの現実、システムの中に埋もれたからといって遅れずに税金や保険を払い、都合の良い候補者に票を入れることだけが大人のすることだとは思わない。あの頃と同じように良い子になるつもりはありません。

自分には伝えたいことがあります。止まれないからこそ残していくことで変えていきたい未来があります。そして今も変わらない仲間は自分に気持ちのこもった手紙をくれました、一番の悩みを遠く離れた自分に打ち明けてくれた親友もいます、結婚して双子を育てる頼れる母親の気持ちも、方や今たとえあいつが塀の中にいようとも、いつか必ずまた皆で集まれる日を信じることが出来ます。

北星学園余市高等学校、自分が人より少し長い五年間の高校生活のうちの最後の三年間を過ごした場所です。それはその後の人生における価値観や方向性に何より関わりの深い時間になっていたということを改めて感じます。何年経っても色褪せずこの胸にある思い出という名の努力や経験そのものが自分たちの受けた質の高い教育だったのかなとも思うからです。

一度高校を中退することになった自分が山先生から教わったことの大きさは今も尚、ではなく今だからこそ限りないものです。

自分はこの時代に精一杯に生きられる時間を、見つけ見失いながらこれからも進んで行くつもりです。

相変わらずにも長々好き勝手に思いを書き綴ってしまって申し訳ありません。

先生もお体を大切に、余り無理なさらないようにお気をつけください。

またご挨拶に伺いたいと思います。

では失礼いたします。

北星余市高校 メモランダム

- 宮川 敏春先生
- 松本 清嗣先生
- 5期 大川原 力
- 9期 馬場 篤

アア
いい天気
いい気持ち
うまいパン
ウシシシ

北星余市とは何であったか

宮川 敏春

私が北星余市の教員として赴任したのは、一九七六年四月、馬場達先生が初代公選校長に就任した年でした。爾来、二十三歳から二十九歳までの六年間、この学校には夫婦共々お世話になりました。ホームページで確認すると、二年後には北大との共同研究が始まり、生徒会では「暴力追放宣言」が決議されたりしています。更に二年後には研究紀要の創刊号が発行されたようです。

しかし何よりも私を鍛えてくれたのは、学級担任として受け持ったB組の諸君との出会いでした。一九七七年は生徒減のために三学級編成をし、入学時のこのクラスは、今では考えられない規模の五十八名の大所帯で出発しました。札幌までの家庭訪問が連日のように続きましたが、生徒会行事ではクラス全員が挙って燃えていたようです。二年B組が仮装の部で最優秀賞を受賞した時の喜びは、本当に譬えようのないものでした。私は卒業式間近の一月下旬から入院するという事態にもなりましたが、無事卒業を迎えた五十二名の三年B組の諸君は、その後無病息災でしょうか。クラブでは放送部の顧問として関わり、夜通し続くラジオ番組制作、朗読、アナウンス部門の練習等、その頃の部員達は本当によくやりました。このように生徒達との思い出が、潮の満ち干のごとく蘇ってきては、静かに消え失せていきます。

現在私は高知高専に赴任してきて十年目を迎え、教員生活も当校で四校目、通算三十年の節目を迎えました。北星余市で培った教員経験という財産を糧に、残りの人生を全うしたいと思っています。みなさんもお元気でお過ごしください。

五十代に半ばして

5期 大川原 力

月日が過ぎゆくのが、早く感じられる頃ごろです。十代の学生時代は遅く感じ、二十代は仕事・社会勉強（遊び）で忙しくて一日一日が早く、三十代は仕事が充実し早く感じられました。四十代は中間管理職になり、多忙な日々を送り、五十代は特に一日一日が早く、あと数年で退職を迎える日が来てしまいます。途中で転職したりといろいろな人生を送っている人達がいることと思います。この時代には、今までは聞いたことがないメタボリック・シンドローム、モンスターペアレントなどという言葉等が出て来たりして、その時代時代に、様々な問題を投げかけられています。

又、現在は団塊の世代と呼ばれる多くの諸先輩方がご勇退する時期を迎えております。私なりに思うことは、その時代時代に与えられた仕事をこなすことが大事だということです。我慢・忍耐が必要だと思います。勉強も必要ですが、一般社会常識を身につけてほしいと思います。スポーツ、政治、経済、文化等、雑学を多く覚えることが役に立つように思われます。たしかに考え方や習慣の違いがありますが、違いを楽しむ余裕が出てくると仕事自体もうまくいくようになっていくのではないでしょうか？

同じ日本人同士であっても、世代や成育環境が違えば、理解し合うのは難しいことですが、少し角度を変えて「違いを楽しむ」気持ちを持てば、余裕が生じ、ストレスを溜めることがなくなって、相互理解も高まっていくのではないでしょうか？

この歳になってくるといろいろな病気など出て来ます。皆様方もくれぐれも健康に留意されて、ご健勝であられますように、ご祈念しております。

るしな・こみゅにけーしょん・やぽねしあ

松本 清嗣

一九九二年に米NGOのインターンとしてカンボジア入りし、翌年末に〝るしな・こみゅにけーしょん・やぽねしあ〟という国際協力NGOを立ち上げました。以降、一三年間カンボジアをベースに、農村での助け

合い協同組合（貸付・農業・保健・女性等）支援、教育（学校建設・奨学金等）・トンレサップ湖漁業資源保全・孤児院建設・運営等、様々な活動を続けています。

　クメール人女性と結婚し、今では四人の子持ちとなりました。収入不足を補うため、アンコールワットのあるシェムリアップにて家族でカフェも経営しています。

　経済発展の見た目とは裏腹にカンボジア社会の矛盾は更に深まっているように見えます。北星で教師をさせてもらったあの経験が、内戦で傷つき、でも鍛えられた人々との協働作業を支えてくれています。

　皆様、くれぐれもお元気で。

母の日　家族でお祝い

「北星余市」我が母校

9期　馬場　篤

　私が北星学園余市高校を九期生として卒業したのは三十一年前になる、その頃は学生服と学生帽の時代で校舎の周りは畑と田んぼだけであった。今よりも更に自然がいっぱいの環境が目の前に広がっていた。

　高校で初めて親友と呼べる友人に出会うことが出来た。入学時に不安と期待の入り混じった気持ちで教室に入り、近い席についてまもなく入ってきた男に声をかけたところ、すぐさま意気投合しその日の内に彼の家に遊びに行くほど仲良くなった。後の進学先も一緒で今も親友と呼べる友人でいてくれている。

　高校時代の思い出は語るときりがないくらい次々と出てくる。一年生研修会、苦しかったマラソン大会、山車を夜遅くまで作って学校から余市駅までの往復を練歩いた学園祭、札幌の朝鮮総連まで取材に行って模造紙に書き込んだ壁新聞コンクール等々。クラスの仲間が皆で助け合って友達を退学させまいと直接職員会議に入ってお願いしたこともあった。

　卒業式には皆が泣いていた。それほど思い出の多い高校生活だった。今でも出来るなら高校生に戻って同じクラスの仲間たちや先生、先輩、後輩たちと過ごしてみたいと思う。どんなにか楽しいことだろう。

　当時の教師たちは五年後までに定年退職によって現役でなくなる状況にあるが、卒業生としてはとても寂しい。母校は、何時までも変わらず昔のままで在り続けてほしい。

　一九八〇年四月に北星学園事務職員に採用となり母校へ配属されて六年間勤務、その後異動となったが二〇〇五年二十年振りにまた懐かしの我が母校で二年間お世話になった。今年の三月大学へ異動する直前、当時の仲間が声を掛けてくれて数人で飲む機会を与えてくれた。二十年近く会っていない者もいたがすぐに昔に戻って打ち溶け合って話せる。『仲間・友情・団結』は健在なのだと、そんな時間を持ってくれた友人たちに感謝した。

第3回2期生同期会

平成19年9月22日
in札幌第一ホテル

発起人／菅原　詠子

　私達二期生は、校舎が作業中の所もある時に入学しました。先生方に助けられ、仲間に助けられた者！　勉学に励んだ者！　色々な思い出のある三年間を過ごした学園です。戦後のベビーブームが終わりのころの生まれでしたので、さまざまな事情で高校に行けない人達も沢山居た時です。思い起こすと、諸先生、学園に感謝の思いでいっぱいです。教師と生徒が真剣にぶつかり合える心暖まる学園でした。

　そんな私達が同期会を始めたのは、六年前のころからです。以前はクラス会等での集いでしたが仲の良い二期生でしたので、他クラスの人達の安否も話題になりました。それではクラス合同で、と同期会が始まりました。

　今回は三回目となりますが、初回の発起人の方々が一番苦労された事と思います。今回も私達発起人は電話作戦で大変でした。「次回は必ず出席します」と言ってくれた人も沢山いました。教師四名、生徒二十二名、総計二十六名の出席でしたが、「翌朝仕事で出席できなかった仲間が顔を出してくれ、嬉しい事でした。集いは二時間の宴会から始まり、二次会も同ホテルに会場を設け、時の過ぎるのも忘れ楽しい会となりました。これからもこの一時を忘れないで、三年後（還暦）にまた開催する事を約束して終わりました。

ECA
EP
もう やりたくねぇーや
ほんとに つかれたビー

母校での教育実習

37期　本間　寛康

今回、私を教育実習生として受け入れて頂き、三年振りに母校に戻ることができた。高校時代三年間通い慣れた学校、そして何度も訪れた職員室、なのに実習初日は緊張のためか、全く違う場所へ来てしまったように感じた。

しかし、緊張しているヒマもなく、すぐにHRクラスの三年D組へとあいさつに行った。三年D組はとても明るくて元気が良い。生徒達は自分の思いを素直にぶつけてくる。私が高校時代にいたクラスと似たような雰囲気を感じ、たしかにここは北星余市だと実感した。

高校時代に受けてきた、先生方の手作りの授業プリントによる授業。それを今回は自分が作ることになった。一時間の授業の中で何を取り上げて、何を伝えるか、授業を計画して実施するという作業は、自分が想像していた以上に大変だった。教科書だけに頼るのは簡単だ。けれど、生きるために必要な力を養うために、先生方は自分達で毎回授業を作って実施していた。それを日常とし、授業以外の業務や生徒指導をこなす先生方は、本当にすごいと感じた。

実習初日に、違う場所に来てしまったように感じたが、日が経つに連れ、自分が在学していた頃と変わらない北星余市を実感した。先生同士も生徒同士も納得がいかないことは納得いくまで徹底的に話し合う。そしてお互いの違いを認め合っていく。それを体験できるのは、北星余市ならではだと思った。

▲右端が本間さん

同窓会員奨学金について

母校の教育活動を支援するという同窓会の目的実現のため、会員の子供が北星余市へ在学中、希望した場合は月五千円を支給します。

十月三十日現在、五人が該当しています。

5期本間（旧利波）美智子さんの娘
智美さん（3年）

8期寺嶋明さんの娘
めぐみさん（1年）

13期安在（旧作佐部）裕子さんの娘
美咲さん（1年）

6期杢保泰司さんの娘
まゆみさん（1年）

12期田中央一さんの娘
美妃さん（1年）

本校の教育を伝えてください

さて、この一年の間にも、皆さんの母校北星余市高校を取り巻く状況はいっこうに改善されてきておりません。今年の春の入学者数も残念ながら百名を切りました。最近の生徒減の原因は少子化の他にもいくつもありますが、その中でも大きなものは様々な形態の高校が出来てきていることが上げられると思います。通信制高校に代表されるそれらの高校は、たとえば本州の人にとっては、津軽海峡を渡り、遠く北海道にある北星余市高校に行かなくても、地元にいて高校卒業の資格が得られるという魅力からすると飛びつきやすい存在なのかと思います。しかし、「北星余市高校には通信制高校等では得ることの出来ない本物の教育がある」と自負しております。

昨年に引き続き同窓生の皆様の力を貸して頂きたく、それぞれの場で、どのような形であっても結構ですので、本校の教育を伝えてください。

（入試担当　千葉敏之）

「しょげてんな!!」

好評発売中!

「北星余市」から生徒の手による
若者へのメッセージの本が誕生しました

北星学園余市高等学校 生徒［編］
しょげてんな!!
ひとりで悩む君へ
北星余市から15人のエール
夢も未来も今この現実の向こうにある KEN-U
高校中退・不登校生を全国から受け入れる北の学園!

本を読み終えて･･･

正直、この本を開くまでは「いつもの成功例」（TV等でよくみかけるあの類の）なのだろうと思っていました。ところが･･･私の想像を遥かに超えるところで、彼らは真摯に「自分の人生」と向き合い、それを「自分の言葉」で伝えようとしていました。彼らはまぎれもなく、今「生きている」、そして「生きよう」としています。

時代を隔てても「北星余市に流れる空気」を彼らと共有できたことを嬉しく、そして誇らしく思います。本を読み終えて、『北星余市の卒業式』に出席したくなりました。

ＯＢとして、親として是非読んでいただきたい１冊です。　（15期･ぇ）

編集後記

北海道に雪の便りが聞こえるこの時期、「シリパの星」の編集作業は大詰めを迎えます。夏の編集会議でOBをピックアップし、事務局や担任を通じて原稿を依頼するのですが、皆さん北星余市への『想い』が深いと見え毎年予想以上の原稿量になります。

事前にお断りしているとはいえ、時間の都合上、編集者の権限で折角の原稿をバサバサとカットしたり、勝手に表題をつけたりしていることを改めてお詫びいたします。

来年はこれらの反省をふまえ、もう少し綿密に字数を決め、各々の『想い』が深く伝わるような「シリパの星」を発行したいと思います。OBの皆さん、引き続きご協力よろしくお願いします。（え）

Shiripaの星　Vol.7
2007年12月7日発行

顧　　問　塚原　治
編 集 長　松村　悦子（15期）
副編集長　松浦　一法（12期）
編集委員　安藤　栄子（1期）
本間美智子（5期）
馬場　希　（12期）
平野満寿美（14期）

[発行]
北星学園余市高等学校同窓会「シリパの星」編集委員会
〒046-0003　余市郡余市町黒川町96番地
TEL(0135)23-2165　FAX(0135)22-6097
URL http://www.hokusei-y-h.ed.jp/

訃　報

二〇〇六年～
教　員　奥野輝夫
二七期　青木道雄
一六期　工藤美喜子（旧姓　丹野）
二六期　柏谷喜代美
二二期　生駒裕幸
一四期　鎌田幸弘
一四期　及川美由紀（旧姓　阿部）